そんな感じ

(Якось так)

名づけようのないものを、探求する者へ

ЯКОСЬ ТАК. ДЛЯ ТОГО, ХТО ШУКАЄ ТЕ, ЩО НЕМОЖЛИВО НАЗВАТИ

グロムコ・ヴォロディミール

そんな感じ. 名づけようのないものを、探求する者へ

Дніпро: Середняк Т. К., 2026, — 46 с.

ISBN 978-617-8923-63-1 (ел.версія)

著者によるウクライナ語原文からの翻訳（AI Gemini と Claude の協力を得て）

Дніпро

«Середняк Т.К.»

2026

疑念、信仰、欲求、知識、知覚。本質が眺めるレンズの、なんと多いことか…。

最初は渇望し、やがて拒絶する。本質が選び、使い、失望し、取り替える道具の、なんと多いことか…。

そして、円環は続く。

しかし、道具が無造作に散らばっているのは、道具のせいだろうか。使い方が拙いのは、道具のせいだろうか。誰が、何を、何に、用いるのか。

この本は、表現者の作業場を整え、魂の暗夜の閉ざされた窓を指し示す。遮るものが何もない時、光はそこを通り抜ける。

白 – 反射（閉ざされた入り口）。

黒 – 吸収（閉ざされた出口）。

透明 – 開放（循環）。

窓は、部屋のちょうど真ん中にある。

欲する者と拒む者の間に。音と静寂の間に。光と闇の間に。顕れたものと顕れぬものの間に。

)(

それを流転の軸として見出すだろう

)(

唯一の真実とは、唯一の真実など無いということだ。

知らざる者こそが、すべてを知る。

欲せざる者こそが、すべてを持つ。

「在る者」と「在らぬ者」の間にあるものこそが、すべてである。

「それ」とは、何ものでもなく、すべてを通して現れるものである。

この本は無料である。なぜなら、金銭で購うことは不可能だからだ。それは自らの『レンズ』を代償にすることでのみ購える。もしレンズが未だ元の場所にあるのなら、その代価はあまりに高すぎたということだ。

胎内がいかに愛しく温かくとも、そこを去らねばならない。

臍の緒がいかに尊く栄養に満ちていようとも、それは切られるものである。

目次

旅人の物語

ある旅人が石の上に座っていると、両手に巨大な石を抱えて運んでいる別の男が現れた。その男は近づくと、自分の大石を別の石の上に重ね、その上に腰を下ろした。

最初に座っていた旅人は、疲れ果てた男を下から見上げた。男は石のピラミッドの上でバランスを取ろうと必死で、疲労困憊して滝のような汗を流していた。

旅人は同情の念を覚え、彼に尋ねた。

「なぜ、その石を引きずって歩いているのですか？」

「旅に出たばかりの頃、最初の一日を終えてひどく疲れ果てていた。その時、この石に出会ったのだ。座ってみると、心から安らぐことができた。その瞬間に悟ったのだ。これは世界で唯一、私に安らぎを与えてくれる石なのだと。この先の道で、これ以上の石に出会うことはない。だから、持ち運んでいるのだ」

「なるほど……では、なぜその石を別の石の上に置き、落ちないようにバランスを取っているのですか？」

「この石は私の聖地なのだ！ 他の石をこれと同じ高さに置くわけにはいかない」

「なんと献身的なことか！ もし人々が同じような献身さですべての命を尊んだなら、世界は平和を知るだろう。さて、この先は上り坂だ。一緒に行かないか？」

「正気か！？ こんな石を抱えて、どうやって山を登れるというのだ？ 私はこの山の周りだけを旅しているのだ」

そう言うと、男は立ち上がり、自分の石を抱えて山の周囲へと歩き去った。

最初の旅人は、そのまま石の上に座り続けた。

少年と金槌の物語

昔、ある少年がいた。子供の頃、彼は家の床から突き出ていた釘に足を引っかけて怪我をした。父親は彼に一丁の金槌を買い与え、こう言った。「これは世界で最高の道具だ。これさえあれば、どんな問題も解決できる。だから、いつも持ち歩きなさい」と。少年は、その通りにした。

持ち歩いているうちに、彼は金槌と一心同体になった。死ぬまでそれを手放すことはなく、何をするにも金槌を使った。

釘を打つのも、食事をするのも、眠るのも。施しを与えるのも、動物を撫でるのも、子供を育てるのも。神を崇めるのも、愚か者を諭すのも。そして、妻と愛を交わす時でさえ、彼は金槌を離さなかった。

流れの物語

水は流れる。何かのためではなく、それが水の性質だからである。水は自由に流れる。流れるうちに、岩に突き当たる。岩を選んだからではなく、岩が流れの中にあったからである。岩に突き当たったとき、水はそれにしがみつくことなく、その周りを流れ去る。それが水の性質だからである。岩の周りを流れる間、摩擦が起こり、岩を削る。岩が悪いからではなく、それが両者の相互作用の性質だからである。岩を通り過ぎれば、水は岩に執着することなく、先へと流れていく。

やがて、丸太に出会うかもしれない。丸太を選んだからではなく、また丸太が岩より優れているからでもない。ただ流れているからである。それが水の性質である。丸太を通り過ぎれば、また先へと流れていく。

水は自由に流れ、出会うものすべてに執着しない。ただ流れ続けるかもしれない。別の岩に出会うかもしれない。奈落へ落ちるかもしれない。より大きな流れに合流するかもしれない。蒸発するかもしれない。あるいは、行く手に燃え盛る溶岩があり、瞬時に蒸発させられるかもしれない。それが悪いからではなく、それが両者の相互作用の

性質だからである。水は抵抗せず、形を受け入れない。無形こそが、水の性質である。

そして、水は再び滴となって集まり、流れる。それを選ぶからではなく、それが正しいからでもなく、何かを望むからでもなく、何から逃げるからでもなく、そこに意味があるからでもない。ただ流れる。それが、水の性質だからである。

見性についての物語

ある男が「見性」に尋ねた。

「どの師が正しく、どの教えが真実であり、それをどうやって見つけ出せばよいのでしょうか？」

見性はこう答えた。

耳にすることを「救い」として受け取るとき、あなたは「狂気」を聞いており、自らも狂人となっている。

耳にすることを「説教」として受け取るとき、あなたは「執着」を聞いており、自らも執着する者となっている。

耳にすることを「言葉」として受け取るとき、あなたは「理性」を聞いており、自らも知的な者となっている。

耳にすることを「意味」として受け取るとき、あなたは「叡智」を聞いており、自らも賢者となっている。

意味と意味の間にある「沈黙」を聞くとき、あなたは「見性」を聞いている。

沈黙が聴くとき、それは見いだし、知る。

見性の状態は、聴いている。

寛容さについての物語

林檎を持つ者はそれを分かち合い、持たざる者は分かち合うべきものを持たない。

信仰を持つ者はそれを分かち合う。分かち合うべき知識を持たないがゆえに。

知識を持つ者はそれを分かち合う。分かち合うべき不知を持たないがゆえに。

不知（ふち）を持つ者は知識の仮設性（かぜつせい）を分かち合う。分かち合うべき見性を持たないがゆえに。

見出だした（知悉した）者はそれを分かち合おうとするが、ただ知識と不知のみを分かち合う。

見性はそれ自体を分かち合わない。なぜなら、何ものにも収まり得ないからである。それはすべてを包み込み、如如（にょにょ）として顕現する。

形に収め、自らのものにしようと渇望する者は、納屋の中で太陽を見つけ、その太陽を納屋ごとポケットに入れようと渇望している。

狂気にとっては – 危険すぎる。執着にとっては – 己のものではなさすぎる。

未熟にとっては – 益なさすぎる。 叡智にとっては – 己のものすぎる。

信仰にとっては – 明白すぎる。 知識にとっては – 仮設的すぎる。

不知にとっては – 一義的すぎる。 「知悉（ちしつ）」にとっては – 流動的すぎる。

貧困にとっては – 壮大すぎる。 富にとっては – 単純すぎる。

強欲にとっては – 目立たなさすぎる。 寛容さにとっては – 空虚すぎる。

善にとっては – 冷静すぎる。 悪にとっては – 柔軟すぎる。

愛にとっては – 届かなすぎる。 憎しみにとっては – 近すぎる。

幸福にとっては – 穏やかすぎる。不幸せにとっては – 有り難すぎる。

光にとっては – 透明すぎる。暗闇にとっては – 明白すぎる。

真実にとっては – 個人的すぎる。 迷妄にとっては – 異質すぎる。

生にとっては – 無形すぎる。死にとっては – 生き生きとしすぎる。

あらゆる形にとっては – 異なりすぎる。

)(

0

序文

新しくもなく、教えでもなく、真理でもない。問いへの答えではなく、見いだす者と「見性」の間にある標識である。

全きものであるがゆえに、何ものも互いを否定しない。否定は、観照者の存在から生じ、その眼差しには方向がある。

眼差しを翻せば観照者が見え、眼差しそのものになれば誰も見えない。

否定や肯定ができるのは、分離したものだけである。全きものが、どうして否定されたり肯定されたりし得ようか。

望みとは、全体の中の焦点を結んだ断片である。観照者の在りようがそれに依存していなければ、それは、それ自体で美しいものへの自然な彩りとなる。もし依存していれば、それは流れを滞らせ、苦しみを蓄積させる。

悪い道具など存在しない。あるのは歪んだ知覚だけである。

この本は「見性」ではない。いかなる知識とも同様に、歪んでいる。これは道ではなく、標識である。知覚を歪めているレンズを指し示しているのだ。

見性は、知識と知識の間の空（くう）に現れる。

I

疑念

疑念は、真実の父である。信仰は、幻惑の娘である。

真実は疑念を愛する。なぜなら、疑念が真実を明らかにするからだ。

幻惑は疑念を憎む。なぜなら、疑念がそれを霧散させるからだ。ゆえに、幻惑は信仰を利用する。

疑念が真実に至るとき、信頼が生まれる。疑念が幻惑に至るとき、真実が現れる。

信頼とは、真実が植え、疑念が水を注ぐ樹木である。

信仰は、盲目に似ている。それによって「多（た）」という幻影が生まれる。

盲目に対する薬は、疑念である。疑念によって「探求」が生まれ、それが知識へと導く。

知識の遺産は、「条件性」である。それによって、受け継ぐ者の自己の境界が定められる。

条件性に対する薬は、「不知（ふち）」である。それが「見性」の扉を開く。

見性は、多という幻影と、条件的な境界を溶かす。

II

信仰

信仰とは、欲求によって形作られる支えである。

支えは、まだ立つことのできない者が立ち上がるのを助ける。それに捕まることで、歩き方を学ぶ。

必要がないのに支えに固執する者は、助けを受け入れているのではなく、重荷に縛られているのである。

支えなしで歩けるほどに足が十分に強くなったなら、感謝してそれを手放し、必要としている者のために残しなさい。

支えをいつ手放すかは、それを持つ者が自分で決めることだ。支えは誰も縛らない。ただ支えるだけである。

真の支えは、自由を与える。力や脅し、あるいは利益によって縛り付ける支えは、幻惑である。

疑念は何ものも破壊しない。それは仮面を見つけ、それを剥ぎ取り、背後に隠された本質をさらけ出すだけである。

もし仮面がないのなら、一体誰が暴かれることを恐れるだろうか。

信仰はまた、親が子供の成長を許すように、耐えがたいものから子供を守る隠れ家でもある。

隠れ家を去らずに、家へ帰ることはできない。親の家を去らずに、自分の家を築くことはできない。

III

探求

信仰は知識を覆い隠す。知っていることを信じることは不可能だ。

ある事柄が明白になるとき、それは知識へと変わる。これは相（そう）の転換である。

探求とは識別することであり、分かちがたいものを言葉に収まる断片へと条件的に切り分けることである。そうして、知識が生まれる。

知識は空間と時間の中に固定され、伝承される。ゆえに、それらによって制限される。知る者は知識の境界に縛られ、継承者はその遺産に縛られる。

継承者は自らの遺産を守り、それに執着し、増やそうと試みる。

知識を増やせば、答えも増える。答えが増えれば、問いも増える。

果てしなく遺産を増やし続ければ、知識はいずれ自らが引いた諸々の境界に突き当たる。

自らの境界を超えて理解することの不可能性の自覚により、**「不知（ふち）」**が現れる。

不知は知識の境界をあいまいにし、「見性」を顕現させる。

IV

知識

知識とは固定であり、今は存在しない「過去」に属するものである。欲求とは固定であり、今は存在しない「未来」に属するものである。

「見性」は永遠である。なぜなら、それは「在る」からだ。それが在るということは、すなわち「今」である。一瞬前は最早なく、一瞬後は決して訪れない。「今」こそが永遠に在る。

本質がどこに、いつ在ろうとも、それはただ「今」の中にのみ在る。「今」の外にあるものはすべて、存在しない。「明日」が訪れるとき、それは「今」であり、「今」が過ぎ去るときも、「今」は依然としてここに在る。

言葉は正確であり、「見性」がそこを通じて現れる「形、時間、空間」を条件的に形作る。「見性」は無形であり、ゆえに言葉で形作ることはできない。

知識は空間と時間の中に存在する。なぜなら、それは物質の境界であるからだ。「見性」はそれらの境界の外に在る。

知識は壁を築き、「見性」はその不在である。

「見性」はすべてであり、時間も空間も占めることなくすべてを貫く。同時に、それは何ものによっても形作られないがゆえに、「無」でもある。

「見性」とは、満たされた「空（くう）」である。何ものでもないがゆえに、すべてを収める。知識は語り、「見性」は沈黙する。

V

条件性

星々の間の「空（くう）」がそうであるように、あらゆる存在の中にも同じだけの空がある。尺度を変えれば、同じ光景が見えるだろう。

小なるものにとって中は大であり、大なるものにとって中は小である。さらに大なるものにとっては不可視であり、極小なるものにとっては不可解である。

これらすべては、単一の模様が生み出す条件的な尺度にすぎない。

左と右、上と下、過去と未来、冷と熱、明と暗。これらはすべて「起点」が生み出したものである。起点がなければ、方向も存在しない。

草は「緑」と呼ばれている。だが、緑とは表面が反射したスペクトルの一部にすぎない。その一部が観照者の眼に入り、ゆえに表面は緑として知覚される。残りのスペクトルは吸収されている。本質は、見えている姿とは異なるものである。

色は、眼と頭が共同で知覚を作り上げた産物であり、その背後にあるのは「周波数」である。周波数もまた、より微細なだけの尺度にすぎない。

知覚は、色を「現実」にするだろうか？ それは誰にとってか？

知覚そのものが、知覚を「現実」にするのだろうか？

分離されたものは条件的なものであり、「見性」は「全きもの」である。

VI

不知

信仰が欲求によって知識を覆い隠すように、知識は条件によって「不知」を覆い隠す。

あるものが不可解であるとき、それは信仰として受け取られる。それが条件の境界によって切り分けられるとき、それは知識として受け取られる。知っているものを、どうして見出すことができようか。知っているとき、そこには既に「二つ」がある。しかし「見性」は「全きもの」である。

私たちは太陽が大きいと言いますが、それが小さいものに対してのみそうであることは黙殺しています。

「自由」と呼ばれるものは、自然な流れに抗って進む可能性のことである。そのためには条件性が必要であり、そのためには「二つ」が必要となる。二つが在るところには、多（た）もまた在る。

真の自由は、自然である。自然さとは、強制のない流れである。美しい舞とは、力ではなく意志によって生まれるものである。

自然な流れであることは、「一体」であることだ。「見性」は直接的であり、言葉は知識の条件によって歪められている。直接的なものは、条件的に歪められたものを正す。

言葉とは、「見性」を見つめる観照者の「レンズ」である。レンズを溶かせば、見いだす者は「見性」へと立ち戻る。

言葉が多ければ多いほど、歪みは大きくなる。

「見性」が深ければ深いほど、言葉は少なくなる。

VII

見性

知識と「見性」の違いは、知識が遺産として受け継がれるものであるのに対し、「見性」は「生きられる」ものであるということだ。

知識は言葉を介した解釈として伝承され、「見性」は「今」そのものである。

それを見出そうとして言葉を纏わせれば、それは歪み、知識へと形を変える。ゆえに、「見性」を分かち合ったり、誰かに受け渡したりすることは不可能だ。

知識は条件的な境界を築き、新たな問いを生む。「見性」は「溶媒」である。答えを与えるのではなく、境界そのものと問いそのものを溶かすのだ。

何かを見出そうとするなら、それ自身にならなければならない。

言葉の及ばぬ領域にあるものを見出すとき、見いだす者は透明になり、条件的な境界は溶けていく。

すべては「全きもの」である。観照者が在れば、全きものはその内にある。「見性」が在れば、そこにはただ「一体」のみが在る。

見いだす者が在る限り、「見性」は在り得ない。

「見性」が在るとき、ただ沈黙するほかない。何も語ることはできないのだ。

VIII

自然さ

欲求は知覚の条件を形作り、「見性」を歪ませる。歪みは個人的な解釈を生み出し、その本質は「多（た）」である。

こうして、知覚の中で「全きもの」が善と悪に分けられる。この善と悪とは、欲求の条件が生み出した幻影である。

自然さにとって、善と悪、有益と無益などは未知である。なぜなら、自然さは「全きもの」であるからだ。

「善」と呼ばれるものは、存在するものの自然な流れである。

「悪」と呼ばれるものは、自然さへの介入であり、存在するものの流れの「ずれ」である。

混沌（カオス）とは、法則性が気づかれていない自然さのことである。

自然さはそれ自体で起こり、介入を必要としない。そうして「善」は起こる。不自然さは、観照者の欲求によって自然なものが「ずれる」ことで起こる。

観照者は、自らの欲求に合わせようとして存在するものの流れを歪ませる。そうして「悪」と呼ばれるものが起こる。

自然さは「一体」である。悪や不適合とは、観照者が欲求に従って自然な場所から「ずらして」しまった善や適合にすぎない。

IX

法則性

可能性の自然さとは、流動性である。可能性の蓄積は、自然な流れの歪みである。

蓄積には目的がある。目的は欲求に支配されている。欲求は、望むものを蓄積するために、流れの進路を変える。

望むものは知識によって形作られる。知識とは、条件的に形作られた全体の中の断片である。欲求は断片から断片へと飛び移り、決して全体を得ることはない。

欲求は苦しみから逃れるために、絶えず好みを移ろわせる。

好みには「二つ」が必要だ。二つが在るところには、多（た）が在る。

好みの焦点は、苦しみの焦点でもある。

欲求は全体を求めながら、それを見出すことができない。欲求は一体化を求める。断片を次々と替えても、見いだすのは苦しみだけである。いかなる断片も全体ではなく、欲求はその中にはない。

欲求が溶ければ、好みもまた溶ける。

好みが溶ければ、苦しみを蓄積させていた境界も溶ける。

X

行為

「それ」と「これ」という分離を生じさせない行為こそが、自然な行為である。

分離を生じさせる愛は、欲求の仮面である。それは全きものを「愛するもの」と「愛さぬもの」に分ける。欲求は、一（いつ）から多（た）を作り出す。

自然な愛は一体的であり、味方も敵も持たない。

それは愛好するものを慈しむことも、嫌悪するものを拒むこともしない。それは対立するものを生み出すことができない。本質は、それ自体ではないものになることはできないが、本質の知覚は（歪むことが）あり得る。

愛は、観照者の欲求によってずらされたものに対し、それが本来あるべき場所への方向を示す。

力は抵抗を生み、そうして摩擦が起こる。闘争とは、欲求によって生み出された多（た）である。行為は、出口でも入り口でもある扉を開く。出ていくものが、入ってくる。

自然な愛は、ただ応じるのみである。それは指し示すものであり、連れ戻すものではない。解き放つものであり、幽閉するものではない。開くものであり、閉ざすものではない。方向付けるものであり、分かつものではない。包み込むものであり、選ぶものではない。

場所を違えたものは、自ずからそこへ戻るだろう。愛はただ、その方向を示すのである。

「為（な）すことのない行為」こそが、全き愛である。

XI

現実

夢は、現実のより微細な顕現である。夢の本質を見出すことは、現実を露わにすることである。夢とは、一体性の中の分離である。

夢の中には、観照者、空間、時間、舞台装置、そして他の観照者たちが存在する。現実にあるものはすべて、そこにも在る。

夢の中では、現実と同じようにすべてが互いに影響を及ぼし合っている。 現実と同じように、観照者は自分を「中心」であると思い込んでいる。

夢が終わるとき、観照者は「それはただの夢だった」と考える。「ただの夢」とは、一体性を纏った条件的な分離のことである。

夢はどこで起きていたのか？ 観照者はどこにいたのか？ 何が空間であり、時間であり、舞台装置であったのか？ 他の観照者たちは誰だったのか？ 彼らの中にいたのは誰か？ 中心はどこへ消えたのか？

観照者が眠っていたとき、すべてを分離したものとして知覚していた。目覚めたとき、すべては「全きもの」へと立ち戻った。

本質は拡張したり分裂したりするのではなく、スケーリングするのである。

中心とは条件的なものであり、それは「焦点を結ぶ」ものである。一体性は、それを「霧散させる」ものである。

XII

循環

空気が石鹸の膜に閉じ込められるとき、それを「石鹸玉の誕生」と呼ぶ。それが生まれたとき、名を与えることができる。膜が保たれている限り、それには独自の物語がある。膜が弾けるとき、石鹸は再び石鹸に戻り、空気は再び空気へと戻る。

石鹸玉とは、顕現の一つの形態である。膜は死んだのではない。形を変えたのだ。中身は死んだのではない。全体へと融合したのだ。その名と物語は、今どこにあるのか？ それが「ここ」にあるとも「あそこ」にあるとも言えないが、それは「在る」。ただ、それが現れるための「形」によって隔てられていないだけだ。

新たな玉が結ばれるとき、それは同じ玉だろうか、それとも別の玉だろうか。源は一つだが、答えは難解に見える。難解さとは、欲求が生み出すものである。

全体の中に、膜がいかに僅かしか存在しないことか。しかし、それが内側の知覚をいかに変えてしまうことか。知覚からこの「レンズ」を溶かしてしまえば、「内」と「外」はどこにあるだろうか。玉の中身は、全体と同じものである。分離とは、一体なるものが見る「次なる夢」にすぎない。もし空気が膜を突き抜けて全体を見渡すことが叶わぬなら、自らの内側を見つめればよい。

「万物の鍵は呼吸することにあり」

XIII

道

道のりを示すことはできるが、「道」を受け渡すことはできない。道を受け渡すことは不可能だ。それは「今」という瞬間にのみ、起こるものである。

今の外側に、「見性」は存在しない。「見性」が起こるとき、そこには境界さえも存在しない。

道のりを進むことは、見出すことである。道のりを見つめることは、信奉することである。道のりを歩むことは、実践することである。信奉することは、拒絶することである。

その場所へ至る道のりは存在しないかもしれないが、そこに辿り着くことは可能だ。それこそが「道」である。

道がその場所へと向かうとき、道のりが築かれる。一つの道のりがあることは、別の道のりの存在を否定するものではない。

あらゆる道のりは、場所へと向かう道の中で融合する。

道は、通り抜けることのできる道のりを示す。しかし、道のりそのものは道ではなく、ただの道のりにすぎない。道は、道のりを通じて通り抜けていくものである。

道がその場所に辿り着くとき、「見性」は明白となる。その場所は、常に道であったのだ。

道と、道のりと、場所。これらの境界が溶け合うとき、それこそが「見性」である。

XIV

一如

もう一方を伸ばすことなく、棒の一端だけを伸ばすことができようか。

闇は光を露わにし、光は闇を具現化する。光とは、自らの中から流れ出す可能性である。闇は光の胎内であり、その中を光は流れていく。

光は闇を散らすのではなく、その中に生きている。闇は光と闘うのではなく、そのための空間である。一方がなければ、もう一方も存在し得ない。

闇と光、非存在と存在、女性的なものと男性的なもの、善と悪、愛と憎しみ、至福と苦しみ。これらは一（いつ）なる現れの両面であり、一つの現象の局面であり、その本質は**一如（いちにょ）**である。

「拒絶」は欲求の娘であり、それは「多（た）」である。

善と呼ばれるものは、観照者の欲求が焦点を合わせた、条件的な尺度の中の望ましい断片にすぎない。

悪と呼ばれるものは、望ましいものから拒絶によって引かれた条件的な境界である。

「見性」は、苦しみをもたらす条件的な境界を溶かし、ただ「在るもの」だけを残す。

在るものとは、欲求の条件によって分けられていない一本の棒である。「見性」は、沈黙によって顕現する。

XV

現れ

形なきものが、どうして形を変えられようか。形を変えるには、形を持たねばならない。

水は、器に満たされることでその性質を変えるだろうか。

形あるものが、形なきものを変えられるだろうか。

空気は、吹き込まれることで笛になるだろうか。笛は空気にとっての制限か、それとも本質が現れるための機会だろうか。

本質は、形に入ることで形そのものになるだろうか。

形は満たされたものの本質を変えるのか、それとも通り抜ける本質が現れるための機会だろうか。

言葉が発せられるから、本質は音になるのだろうか。それとも言葉は、本質が現れるための形にすぎないのだろうか。

光が窓を通らないのは、光がないからか、それとも何かが遮っているからか。

本質はレンズを通ることで変わるのか、それともレンズが、それを見る者の知覚を変えるのだろうか。

鏡は覗き込む者そのものになるのか、それとも映るものをただ反射しているだけだろうか。

何も映らぬとき、鏡は何を反射しているだろうか。

Автор: Громко Володимир Сергійович

Назва: Якось так. Для того, хто шукає те, що неможливо назвати

9 786178 923631

Видавець «ФОП Середняк Т.К.», 49000, Дніпро, 18, а/с 1212

Свідоцтво про внесення суб’єкта видавничої справи до Державного реєстру

видавців, виготівників і розповсюджувачів видавничої продукції ДК № 4379 від 02.08.2012.

Ідентифікатор видавця в системі ISBN 8923

49000, Дніпро, 18, а/с 1212

тел. (096)-308-00-38, (056)-798-04-00

E-mail: 7980400@gmail.com